

近江八景：矢橋帰帆（やばせのきはん）

矢橋は、大津の向い、琵琶湖東側にある港町でした。現在は草津市の一部となっていますが、最盛期の矢橋港は、京都と東京を結ぶ東海道の巡礼者や旅人に人気がありました。東海道は琵琶湖を南に巡り、瀬田川を渡ります。そこで急いでいる人たちは、東海道を巡り、瀬田の唐橋で川を渡るのではなく、矢橋で船を借りて湖を渡って、大津に向かうことが多かったのです。1800年代後半に鉄道が登場するまでは、船を利用するのが最速の手段でした。

歌川広重（1797-1858）の保永堂版木版画には、矢橋の小さな港から大津に向かって、様々な高さや角度で張った帆の船列が、延々と続いているように見えます。中には、ほとんど触れ合っているように見える船も。

今日では港の賑わいもなくなり、岸边からの眺めも変わっています。矢橋帰帆島は1982年に港の前に建設され、近代的な近江大橋を利用して湖を渡るのが最も一般的な方法になっています。しかし、今では帆ではなくエンジンで航行している船が多いとはいえ、琵琶湖にはまだまだ多くの船が行き交っています。